

けるびん × Mt.Guchi

2023.10

博士の小部屋 開設記念タイアップ対談

ブログ「阪大工学部の散歩道」でライターとして活躍するお二人。

普段は顔を合わせる事のないライター同士で、「博士後期課程進学」について率直な意見を交わしていただいた。

Q:まず、お二人がどのような経緯で博士後期課程に進学することになったのかについて、お聞かせください。

けるびん：

幼少期に海外で過ごした経験から、その特有のフランクで陽気な雰囲気鮮烈にプラスのイメージとして残っており、また、その頃のつながりから周囲の人間関係も海外志向が強く、自然と自分も「将来は海外で働きたい」という思いが強くなりました。

学部入学当初は、海外で活躍する人たちを見て「いつかは自分も」と憧れを抱いていただけでしたが、世界と渡り合う人材になるには？と考えたとき、修士では足りない、もっと専門性を尖らせていかなければ海外では土俵にも上がれないと感じ、進学することを決めました。現在所属する研究室も海外に渡航する機会が多いという基準で選びました。

Mt.Guchi：

小学校4年の頃に新発売の電子機器を見て感動を覚えた経験があり、エンジニアを志しました。当時は「技術者であり経営者」というスティーブ・ジョブズのような人間を目指していました。

大学に入ってから塾講師のアルバイトを通じて「人にもものを教える」ことにハマり、エンジニアと教育の両側面を担う高校の理系教員を目指すようになりました。

学部の必修科目と教職科目の両立はかなり大変でしたが…

学部4年で研究室に配属されてから大学の先生方と密接に関わるようになったことで、「研究」「教育」の二足のわらじを履きこなす「スーパーマン」のような先生方に憧れを持つようになりました。結果、エンジニア・教育・研究の3要素を兼ね備える大学教員を目指そうという今の夢に至り、更なる研究者修行のため博士後期課程への進学を決断しました。



Mt.Guchiさんが所属する情報科学研究科の庭

Q:それぞれ異なる角度から博士後期課程への進学を志したお二人ですが、進学してみて感じることにについて教えてください。



ドイツ出張の様子

けるびん：

コロナが明けて、海外を飛び回りたいという自分の希望がようやく叶えられつつあって、とても満足しています。知らない土地へ行って、知らない人達に対して研究発表をしたり議論を交わしたりすることはとても刺激的で、コミュニケーション能力やプレゼン能力などが強制的にスキルアップしていく感覚があります。思っていた「研究に没頭」の暗いイメージとは全く異なり、むしろオープンで、自分の世界が以前よりも広がった気がします。

Mt.Guchi：

けるびんさんのおっしゃること、すごくよくわかります。研究室に入ってみて、コミュニケーションスキル高い人が多いなっていうのは最初に思いました。

プレゼン能力や文章作成能力など、どこへ行っても必ず必要とされる能力が磨かれるのもあって、皆さんとても優秀だと思います。

Q:お二人のお話を聞いているととても生き生きと日々の研究生生活を過ごしているように拝見しますが、しんどいこと、つらいこともあるかと思います。どんな風乗り越えていますか？

Mt.Guchi：

最初は同期がみんな就職してしまって寂しいという思いもありましたが、それはすぐ慣れました。

会おうと思えばすぐ会えますしね。先輩や後輩、先生方とも毎日お喋りしたりソフトボールしたり、楽しく研究室生活を送っています。

あと、成果が出るときも出ないときも含めて、波があるんだってことを理解しておくことが重要だと思います。うまくいかないその時だけを切り取ってしまうとしんどくなっちゃうので。いつかはうまくいくだらう、という楽観的なマインドを持っていれば、うまくいかないときも含めて研究が好きになれると思います。

けるびん：

本当にそうですよね。あと、人のことを気にしすぎてはいけないって言われることもあるけど、自分はノリでやる気が出たりするので、周りが頑張ってるのを見て「負けてられんな、よっしゃやったる」みたいな具合で研究へのモチベーションを上げたりしています。

負けず嫌いなんで（笑）



無線実験で使用中のロボット

Q:進学前に抱いていた博士後期課程のイメージとか、進学に対する不安などはありましたか？

けるびん：

博士後期課程に伴う不安というと主に金銭面・孤独感・将来という要素があると思います。自分の場合孤独感に対しては、博士課程は自分の夢を実現するための修業期間ととらえて、孤独でも「やっていけるかな」じゃなくて「やるんだ！」って思うようにしています。

金銭面については、当時の教授の吹込みもあって（笑）、経済的援助の枠は増えてる中博士後期課程への進学者は増えていないから、「どんどん援助受けられるよ」、「今が狙い時だよ」って言われて。でも確かにそうだなって思います。将来への不安は全く、感じる必要なし！ドクター出て就職に困っている人なんて、周りに見たことないし、みんなすっごい活躍してますよ。というか、日本国内の状況だけ、ネットにあるマイナスの情報とかだけを見てるから不安になるんですよね。博士卒って言ったら重宝されるのが普通です。

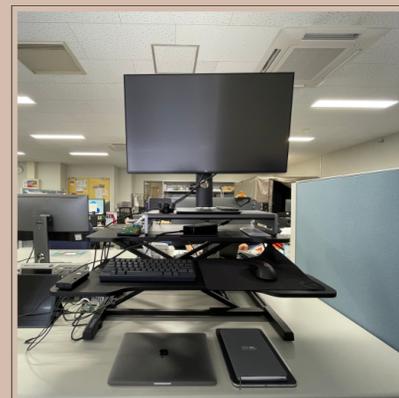
Mt.Guchi :

けるびんさん、さすがです。私が言語化しなかったことをここまで見事に整理してくださるとは…!! おっしゃる通りです。実際に進学してみて、まあやってみればなんとかなるでしょ！みたいな強さは手に入れた気がします。進学前は成果が出なかったらどうしようとかいろいろ考えていたんですけど、どれだけ考えていても実際には何も起こらないわけで（笑）結局、とりあえずやってみる！の繰り返しを通じて、自信がついてくるんですね。

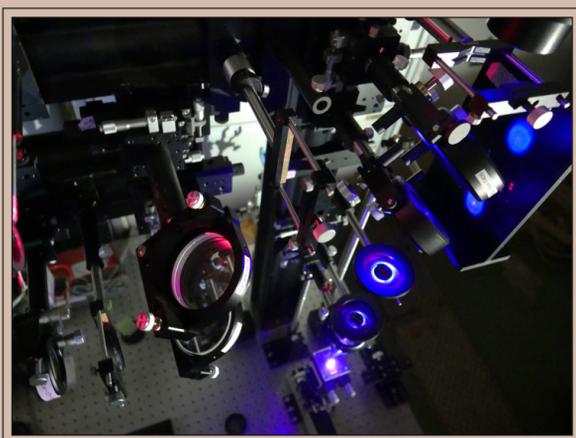
Q:研究生活では時間的な制約がない分、そのあたりも自分でコントロールする必要があるかと思いますが、お二人の日々の基本的なスケジュールはどんな感じですか？

Mt.Guchi :

起きる時間、大学に着く時間、大学を出る時間、とかはある程度決めて自分の中でルーティン化してますね。夕方からはアルバイトもやっているし、ジムにも通っています。研究が好きすぎてつい土日にも研究室に来ちゃうので、オンオフの切り替えはきちんとしないとと思います。



Mt.Guchiさんの研究室机



けるびんさんの実験風景

けるびん :

全く逆です！昼までには大学に着きたいな、くらいで、着いてすぐ取り掛かれない日もあれば、もう帰ろうかな、って思ってたのに、周りをもっとやるって聞いて「負けてられん」ってなって急遽延長したり（笑）気分です。

本当に逆ですね！制約のない中で自分なりの時間の使い方とかコツを見つけることも一つのスキルですよ。

Q:最後に、お二人の今後の目標についてお聞かせください。

けるびん :

自分はレーザー溶接を専門としているんですが、レーザーの基礎研究をやっている研究者はいても、溶接との両方をつなぐ架け橋的役割をできる人材はまだ多くないです。レーザー溶接自体あらゆる場面への応用が期待される技術です。そこで、そのような技術を専門とする人材であることを武器に、海外の企業へどんどん自分を売り込んでいきたいなと思っています。



けるびんさんの所属研究室がある接合科学研究所

Mt.Guchi :

私は、日本の大学で教鞭を執りたいと思っています。海外の大学で研究をして研究成果を日本に輸入するという考え方もあるとは思いますが、私は日本で直接的に、自分がお世話になった方々や今の教え子たちに自身のスキルを還元していきたいと思っています。私に大学教員という将来の夢を与えてくれた先生方のように、今度は自分が未来の学生に立派な背中を見せられるよう、引き続き奮闘します！

「ドクター」への偏ったイメージを払拭してくれるような、明るく社交的なお二人。進学を通じて自分で自分を磨いてこられた自負が、お二人自身を輝かせているような気がしました。

偶然にも全く逆のフィールドを目指して日々研究に励んでおられますが、これからも様々な経験を通じて、それぞれの夢に近づくべく飛躍を遂げられることと思います。

今後のお二人のご活躍はぜひ、公式ブログ「[阪大工学部の散歩道](#)」で追読ください。